



宮崎大学学術情報リポジトリ

University of Miyazaki Academic Repository

幼稚園と小学校高学年の交流活動において、幼児に社会的スキル指導を行った教育実践研究

メタデータ	言語: jpn 出版者: 宮崎大学教育文化学部附属教育実践総合センター 公開日: 2011-08-11 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 立元, 真, 中原, 久代, 郡司, まり子, 高松, まゆみ, 横山, 登, 青, 猷二, Nakahara, Hisayo, Gunji, Mariko, Takamatsu, Mayumi, Yokoyama, Noboru, Ao, Yuji メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10458/3479">http://hdl.handle.net/10458/3479</a>

# 幼稚園と小学校高学年の交流活動において、 幼児に社会的スキル指導を行った教育実践研究

立元 真・中原久代<sup>1</sup>・郡司まり子<sup>1</sup>  
高松まゆみ<sup>2</sup>・横山 登<sup>2</sup>・青 猷二<sup>1,2</sup>

An Educational Attempt at Social Skills Training for Kindergarten Children  
interaction with Higher Elementary School Children

Shin TATSUMOTO Hisayo NAKAHARA Mariko GUNJI  
Mayumi TAKAMATSU Noboru YOKOYAMA Yuji AO

昨今、本邦では、子どもたちの社会的適応能力の発達を支援する社会的スキル指導に教育界の注目が寄せられている。社会的スキル指導は、そもそもは、なんらかの社会的不適応を示す子どもに対して、個別に、あるいは小集団の形で行われてきた（佐藤、佐藤、岡安、高山、2000）。しかし、昨今では、予防的、教育的な観点から、学級に在籍するすべての子どもたちに対して社会的スキルを学習する機会を意図的に提供しようとする、学級単位での集団社会的スキル訓練が大きな注目を集めるようになってきており（佐藤・立元、1999）、幼稚園・保育所（佐藤・日高・後藤・渡辺、2000；福田、1998）や、小学校における社会的スキル指導に関する実践を報告する学術論文（藤枝・相川、2001；後藤・佐藤・高山、2001；後藤・佐藤・佐藤、2000；金山・後藤・佐藤、2000など）が多く示されてきている。さらには、小学校で社会的スキル指導を行うための実践的な書物まで出版されるに至っている（小林・相川、1999）。

さて、子どもの社会的スキル指導においては、大学のスタッフが幼稚園や保育所・小学校・中学校に赴いて子どもたちに個別にあるいは集団的に指導を行うケースが多かったが、最近では、現職教員の大学院研修の普及とともに、教員自身が直接に、教育的指導の一貫として取り組むケースも増えてきている（後藤・佐藤・佐藤、2000）など。

しかしながら、幼児においては、保育者が社会的スキル指導を行っている実践は、福田（1998）や佐藤・佐藤・岡安・立元（1999）などを除いてまだ少ない。幼稚園や保育所での実践が広まっていくためには、保育者自身が指導を行う実践がさらに積み重ねられ、ノウハウが蓄積されていく必要がある。そこで本研究は、幼稚園の日常的な保育活動の中で教師による社会的スキル指導を集団的に行い、その効果、つまり幼児の社会的スキルの向上および「不安・引込み思案」傾向、「攻撃・妨害」傾向、「不注意・多動」傾向などの問題行動傾向の改善が見られるか否かを検討することを第一の目的とする。

ところで、平成12年度から施行された新しい幼稚園教育要領、平成14年度から完全施行

になった新しい小学校学習指導要領とも、幼児・児童と障害児・者、あるいは他の年齢層の子どもや老人などの異年齢間の交流の促進をうたっている。これにともなって、幼稚園・保育所、小学校などの各種の施設・学校で、他の学校や施設との交流が試みられ始めている。この異年齢の交流の際に、幼児と、小学校の高学年の児童あるいは中学校や高等学校の生徒との交流は、児童・生徒の側には、守り育てるべき存在である幼児を知り、人間関係を広げ、さらに関係を作り維持していくスキルを学ぶという明確な目的がたてやすい。他方、幼児の側からみると、親や保育者ほどの責任はなく、幼児と関わる技量が低く、ただ遊んでくれたりするだけの児童や生徒との交流のメリットは人間関係の幅をわずかに広げることだけであり、交流によって逆に児童・生徒に対する望ましくないスキルを身につけさせてしまうことすらある。そこで、幼児の側には、単に遊んでもらうだけでなく、児童・生徒との交流の場を、他の保育活動の中で学んだ望ましい社会的スキルを実践応用する場として位置づけるという教育的試みを導入することにした。本研究は、その教育的試みを実践し記録として示すことを第2の目的とする。

## 方 法

### 対象とする社会的スキルの選定

交流活動の効果をあげるための社会的スキル指導を行なうために、交流場面をビデオに撮って子どもたちに共通して指導が必要な社会的スキルを把握することにした。さらに、担任教師2名が、初回に測定した幼児用社会的スキル尺度の項目を参照して子どもたち全体にわたって得点が低かったものの中から、小学生との交流場面や日常の遊びの中でも応用できる項目として以下の4つのスキルを選び出し、これをスキル指導の中で教えるべきスキルとした(Table 1.参照)。

Table 1. 本研究の社会的スキル指導におけるターゲットスキル	手続き
① 心のこもった挨拶をする	交流に先立って、社会的スキルの指導を行ない、さらに子ども達の日常の幼稚園生活の中で実践指導を行った。
② 小学生と話ができる	
③ 小学生の名前を呼んで話ができる	
④ 小学生の話を注意して聞く	

た。そして交流場面を子どもたちが学んだ社会的スキルの実践・応用の場と位置づけた。

### 社会的スキル指導の方法

①「心のこもった挨拶をする」、②「小学生と話ができる」、③「小学生の名前を覚える」の3種類をターゲットスキルとした。これらのターゲットスキルは、子どもの社会的スキル指導で用いられる代表的社会的スキル(佐藤・佐藤・岡安, 1999)を参考にしながら、交流場面や日常的な保育場面での観察をもとに2名の担任保育者が選定した。これらは、ほぼ週に1つずつのペースで指導を行った。また、④「小学生の話を注意して聞く」については、3週間を通して指導を行った。集団社会的スキル指導は、平成14(2002)年10月第2週より、ほぼ1ヶ月間にわたり(Table 2.参照)、以下の指導案(Table 3,4,5参照)に基づく設定保育によって行った。

### 社会的スキルと問題行動傾向の評価

幼児用社会的スキル尺度は、社会的スキル領域と問題行動領域の項目群からなり、社会的ス

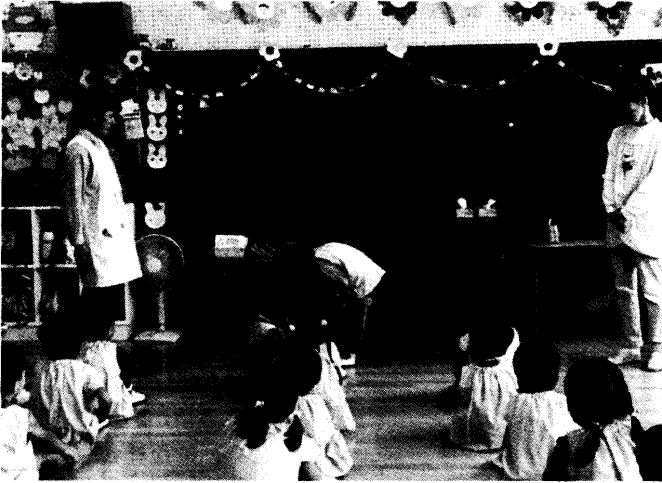


Figure1. 社会的スキルの集団指導（直接指導）

### 交流場面

幼児たちと小学校高学年の交流は、前年度（今年度の5年生が4年生の時）から行われている。この小学校は、前年度までに総合単元的な道徳学習の時間を設けて研究開発を行ってき



Figure2. 社会的スキルの集団指導（演習場面）

度にわたっての交流の時間を経験し、ほかにも昼休みの時間に幼稚園を訪問して幼児と遊ぶなどの交流を日常的に行ってきた。小学校高学年の児童たちは、ときに幼児とうまく関われなかったり、自らの思いを優先させすぎてしまったりと、まさに発展途中であったが、また、交流活動の中での学習を通して確実に幼児と関わる力を身につけてきていた。

### 被験児

本研究における教育的介入の対象となる幼児は、3・4・5歳児の混合の2クラス編成の保育形態で幼稚園生活を送っている。日常の保育の中で、2つのクラスが一緒になって活動す

キル領域は「社会的働きかけスキル」「自己コントロールスキル」「協調スキル」「教室活動スキル」の4つの因子を、また問題行動領域は「不安・引っ込み思案傾向」「攻撃妨害」「不注意・多動」の3つの因子の行動傾向を測定することができる。指導の前の事前評価に加えて、3回の集団スキル指導とその般化場面である交流活動の直後に、幼児版社会的スキル尺度を用いて子ども達の社会的スキルおよび問題行動傾向の測定を行った。

Table 2. 社会的スキル指導および交流活動のスケジュール

日付	曜日	社会的スキル指導の日程		
5	金	事前評価		
7	月	代休		
8	火	集団スキル指導①	実践指導 ①	スキル指導④ 実践指導④
9	水			
10	木	交流		
11	金	スキル評価		
14	月	休日		
15	火	集団スキル指導②	実践指導 ②	
16	水			
17	木	交流		
18	金	スキル評価		
21	月			
22	火			
23	水			
24	木			
25	金	集団スキル指導③	実践指導 ③	
28	月			
29	火			
30	水			
31	木	交流		
1	金	スキル評価		

ることも多く、そのため集団的な社会的スキル指導も小学生との交流活動も、2クラスを一緒にしておこなった。また、子どもたちの構成は、5歳児17名（男児11名、女児6名）、4歳児12名（男児8名、女児4名）、3歳児11名（男児6名、女児5名）であった。なお、事情があつて各3回の集団的な社会的スキル指導および交流活動のいずれかに欠席した幼児2名は分析から除外した。

また、幼児たちの交流の対象となった小学校高学年の児童は、第6学年23名（男児10名、女児13名）、第5学年23名（男児14名、女児9名）から構成されていた。

### 結果と考察

交流保育において、社会的スキル指導を取り入れた効果を、幼児用社会的スキル評定尺度によって評価した。指導開始前の初回の測定、第1回目の集団的指導および日常生活の中での指導や交流活動における応用の直後の2回目の測定、第2回目の集団的指導等、第3回目の集団的指導等の後に測定した子どもたちの、「社会的働きかけスキル」、「自己コントロールスキル」、「協調スキル」、「教室活動スキル」の4つの下位項目の社会的スキル得点の変容をFigure3に示す。

繰り返し測定の1要因分散分析を行ったところ、子どもたちの「社会的働きかけスキル」の得点の平均値は、指導開始前の初回の測定値から4回目の指導終了後の測定にかけて一貫して向上していることが示された ( $F_{(1,36)}=711.96, p<.001$ )。

子どもたちの「自己コントロールスキル」の得点の平均値も、指導開始前の初回の測定値から4回目の指導終了後の測定にかけて一貫して向上していることが示された ( $F_{(1,36)}=766.49, p<.001$ )。

また、「協調スキル」の得点の平均値も、指導開始前の初回の測定値から4回目の指導終了

Table 3. 「こころのこもった挨拶」のための保育指導計画（平成14年10月8日(火)）

本日のねらい	心のこもったあいさつができる。
幼 児 の 活 動	教師の援助と指導上の留意点
<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 手遊びをする (まつぼっくり)</li> <li>○ 正しい挨拶の仕方を知る。 ・話を聞く。</li> <li>・モデル(T君)の挨拶を見る。</li> <li>・良いところを皆で話し合う。</li> <li>・みんなで挨拶を交わす。</li> <li>○ ゲームをする ・歌をうたう(握手でこんにちは) モデルと2人での実践</li> <li>・年長児の実践</li> <li>・年中児の実践</li> <li>・年少児の実践</li> <li>○ まとめの話を聞く</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・みんなの知っている手遊びをして楽しい雰囲気作りをする。</li> <li>・いつも正しく挨拶ができるT君を例に挙げて興味を持たせるようにする。</li> <li>・立ち止まる、相手を見る、挨拶をしながら頭を下げる、もう一度相手を見る、を繰り返し話すようにする。</li> <li>・ゆっくりと年少児にもわかるように話す。</li> <li>・T君に声を掛けながら一緒に挨拶を交わすようにする。</li> <li>・発表できたときは必ずほめるようにする。</li> <li>・発表の途中で言えなくなったときは言葉を補ってあげながら最後まで発表できるように援助する。</li> <li>・発表だけでなく聞き方にも目を向けしっかり聞いている子どもたちをほめるようにする。</li> <li>・いつも消極的な子どもたちに注意し、手を挙げた時にはすぐに指名してあげる。</li> <li>・全員でやったあとに、消極的な子どもたちにもやらせてみて自信を持たせるようにする。</li> <li>・ゲームをやりやすいように円形に座らせる。</li> <li>・挨拶の部分強調しながら歌うようにする。</li> <li>・ゆっくりと歌いながら『握手でこんにちは』の部分が正しくできるようにしたい。</li> <li>・良くない例もやってみせ遊びに変化を持たせる。</li> <li>・みんなで歌いながらパートナーを変えてやってみる</li> <li>・友達のやり方も見せながら自分の挨拶の仕方を確認させる。</li> <li>・年中児、年少児に感想を聞きながら年長児の挨拶をほめてあげたい。</li> <li>・再度、やり方確認しては始めるようにしたい。</li> <li>・まだ、相手を変えることに不安を持つ子どもたちもいるので同じ相手でゲームを楽しませる。</li> <li>・楽しく挨拶ができたなら全員でほめるように促す。</li> <li>・一人でできないときは年長児に教えてあげるように声をかけておく。</li> <li>・上手にできた時はみんなでほめてあげる。</li> <li>・特に消極的な子どもたちが楽しくできるようにパートナーには配慮したい。</li> <li>・年齢別に座り、しっかり話を聞かせる。</li> <li>・よくできたことをほめて、いろいろな場面で使えることも伝える。</li> </ul>

Table 4. 「小学生と話ができる」のための保育指導計画（平成14年10月15日(火)）

本日のねらい	友達を誘うときや、仲間にはいるきっかけとしての言葉を身につける。
幼児の活動	教師の援助と指導上の留意点
<p>○ 手遊び「やきいもジャンケン」をする。</p> <p>○ 話を聞く。</p> <p>★ 女の子の気持ち…男の子が何も言わず勝手に遊びだしたので、いやな気持ち</p> <p>★ 男の子の気持ち…「ダメ!」といわれ悲しい気持ち</p> <p>○ 仲良く遊ぶ方法を考える</p> <p>・「いっしょに遊ぼう!」と、声をかける</p> <p>★ 相手に近づく</p> <p>★ 相手をきちんと見る</p> <p>★ 聞こえる声で言う</p> <p>★ 笑顔で言う</p> <p>○ いっしょに遊ぼうゲームをする</p> <p>・ 箱の中からブロックを選ぶ</p> <p>【赤】年少児 【緑】年中児 【黄】年長児 【青】だれも誘えない</p> <p>} を誘う</p> <p>○ まとめ話を聞く</p>	<p>・ みんなの知っている手遊びをして楽しい雰囲気作りをする。</p> <p>・ ジャングルジムでの遊びの様子を話し、子どもたちにイメージを持たせる。</p> <div style="border: 1px dashed black; padding: 5px; margin: 10px 0;"> <p>ジャングルジムで女の子が遊んでいました。そこへ、男の子がやって来てジャングルジムで遊ぼうとすると、「ダメ!」と女の子に言われてしまいました。女の子と男の子はそれぞれどんな気持ちでしたか、考えてみましょう。</p> </div> <p>・ できるだけ子どもたちからたくさん言葉を引き出し、まとめながら考えさせていく。</p> <p>・ 年長児を中心に指名をする。年中児・年少児には、わかりやすく説明を加えながら話を進める。</p> <div style="border: 1px dashed black; padding: 5px; margin: 10px 0; text-align: center;"> <p>友達と遊ぶとき、最初にすることは何でしょう。</p> <p>↓</p> <p>「いっしょに遊ぼう」と声をかける。</p> </div> <p>・ モデルを使ってルールの確認をする。</p> <p>・ 2クラス向かい合って座らせる。</p> <p>・ たくさん誘えた方が、勝ちとする。</p> <p>・ 年長→年中→年少の順番に全員経験させる。</p> <p>・ ブロックの色を確かめて、好きな子を誘いに行かせる。</p> <p>・ うまく誘えたら、自分たちのチームにその子を連れて行き、次の人にバトンタッチをしてゲームを続けていく。</p> <p>・ 年齢別に座り、しっかり話を聞かせる。</p> <p>・ 子どもたちの反応や気持ちを大切にしながらゲームを振り返り、まとめ話をする。</p>

Table 5. 「小学生の名前を呼んで話ができる」のための保育指導計画（平成14年10月25日（金））

<p>本日のねらい</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 名前を呼んで、心のこもったあいさつができる。</li> <li>・ あいさつりレーができる。</li> </ul>
<p>幼 児 の 活 動</p>	<p>教師の援助と指導上の留意点</p>
<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 手遊びをする （まつぼっくり）</li> <li>○ 交流を振り返る             <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 話を聞く。</li> <li>・ モデル(T君)の挨拶を見る。</li> </ul> </li> <li>・ 良いところを皆で話し合う。</li> <li>・ みんなで名前を呼んで挨拶をする。</li> <li>○ ゲームをする             <ul style="list-style-type: none"> <li>・ あいさつりレーに説明を聞く</li> <li>・ ゲームをする。</li> </ul> </li> <li>・ 逆まわりでやる</li> <li>・ 左右同時にまわす</li> <li>・ 小学生の名前を言う</li> <li>○ まとめの話聞く</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ みんなの知っている手遊びをして楽しい雰囲気作りをする。</li> <li>・ 他の幼稚園の先生から誉められた話をして興味を持たせるようにする。</li> <li>・ 名前を呼んで挨拶をしていることに注目させたい。</li> <li>・ ゆっくりと年少児にもわかるように話す。</li> <li>・ T君に声を掛けながら一緒に挨拶を交わすようにする。</li> <li>・ 発表できたときはオーバーにほめるようにする。</li> <li>・ 発表の途中で言えなくなったときは言葉を補ってあげながら最後まで発表できるように援助する。</li> <li>・ 発表だけでなく聞き方にも目を向けしっかりと聞いている子どもたちをほめるようにする。</li> <li>・ いつも消極的な子どもたちに注意し、手を挙げた時にはすぐに指名してあげる。</li> <li>・ 全員でやったあとに、消極的な子どもたちにもやらせてみて自信を持たせるようにする。</li> <li>・ ゲームをやりやすいように円形に座らせる。</li> <li>・ 挨拶をされたら挨拶を返しその後、反対の人に名前を言って挨拶をすることを説明する。</li> <li>・ できるだけ年長児の隣には年少児をおいて年長児が手本になるようにしたい。</li> <li>・ ゆっくりと楽しい雰囲気で作らせた。</li> <li>・ 友達のやり方も見せながら自分の挨拶の仕方を確認させる。</li> <li>・ 逆周りでやりゲームに変化を持たせた。</li> <li>・ 再度、やり方を確認しては始めるようにしたい。</li> <li>・ できるだけたくさんの子どもの名前が言えるように場所を交代させたりする。</li> <li>・ 楽しく挨拶ができたなら全員でほめるように促す。</li> <li>・ いつも遊んでくれる小学生の名前をみんなの前で発表する。</li> <li>・ なかなか言えないときは次回の交流の時に名前を聞いてみることをアドバイスする。</li> <li>・ たくさん言えた子どもたちに対しては前に出してみんなで誉めてあげたい。</li> <li>・ 年齢別に座り、しっかりと話を聞かせる。</li> <li>・ よくできたことをほめて、いろいろな場面で使ってみることを伝える。</li> </ul>



後の測定にかけて向上していることが示された ( $F_{(1,36)}=1491.19, p<.001$ )。

さらに、子どもたちの「教室活動スキル」の得点の平均値も、指導開始前の初回の測定値から4回目の指導終了後の測定にかけて一貫して向上していることが示された ( $F_{(1,36)}=711.96, p<.001$ )。

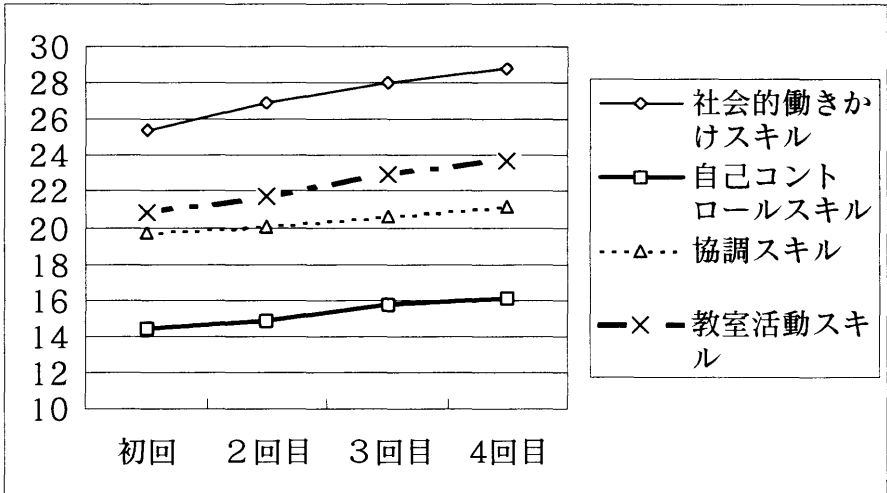


Figure 3. 社会的スキルの推移

注) 幼児用社会的スキル尺度において測定できる社会的スキルの下位因子、すなわち、「社会的働きかけスキル」「自己コントロールスキル」「協調スキル」「教室活動スキル」は、各因子ごとに満点が異なっているため、下位因子同士の比較はできない。誌面の制約のためにまとめて載せてあるが、ここでは、各下位因子の得点の時系列にそった変化に注目すべきである。

社会的スキル尺度の問題行動領域においては、子どもたちの「不安・引っ込み思案傾向」の得点の平均値は、指導開始前の初回の測定値から4回目の指導終了後の測定にかけて一貫して減少していることが示された ( $F_{(1,36)}=255.94, p<.001$ )。

また、子どもたちの「攻撃・妨害」の得点の平均値も、指導開始前の初回の測定値から4回目の指導終了後の測定にかけて一貫して減少していることが示された ( $F_{(1,36)}=320.38, p<.001$ )。

さらに、子どもたちの「不注意・多動傾向」の得点の平均値もまた、指導開始前の初回の測定値から4回目の指導終了後の測定にかけて一貫して減少していることが示された ( $F_{(1,36)}=334.18, p<.001$ )。

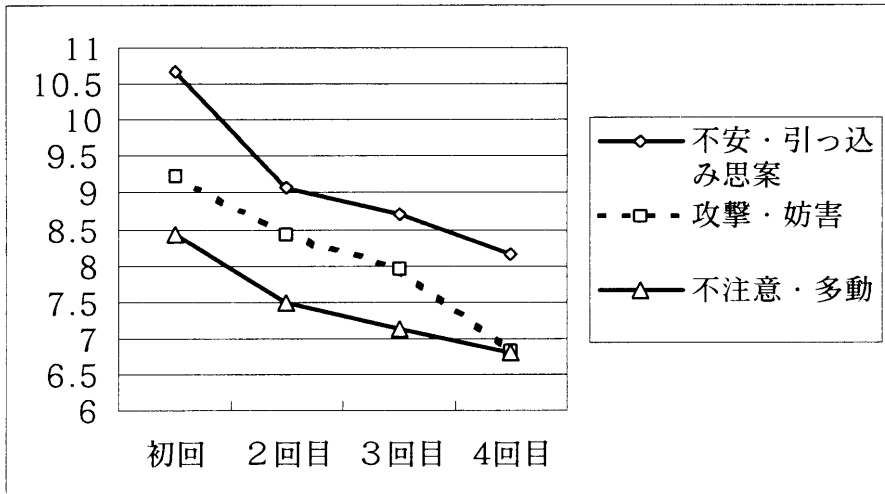


Figure 4. 問題行動傾向の推移

注) 幼児用社会的スキル尺度において測定できる問題行動傾向の下位因子、すなわち、「不安・引っ込み思案」傾向、「攻撃・妨害」傾向、「不注意・多動」傾向は、各因子ごとに満点が異なっているので、下位因子同士の比較はできない。誌面の制約のためにまとめて載せてあるが、ここでは、各下位因子の得点の時系列にそった変化に注目すべきである。

幼児の社会的スキル得点は、社会的スキル指導と交流活動を組み合わせて行うという今回の教育的介入の期間に、一貫して向上した。昨今の治療的あるいは教育的な介入の効果を検討する研究では、介入と同じ時期に、介入を行わずに測定のみを行う統制群を設けて、厳密な意味での介入効果の検討を行うことが目指されている。しかしながら、実際の教育現場での活動では、1つの園で一部の子どもたちに介入を行い、他方に介入しないという方法は教育的関わりに平等性を保証する観点から困難であることが多い。また、本研究のように小学校高学年との交流活動を同じような形で行っている学校が近隣にみあたらず、またあったとしても、条件を厳密に統制することが困難である場合には、まずは、介入前後の比較においてその効果を検討しつつ教育効果を確認し、その後条件を変化させながらさらに詳細に介入効果を検討していくことが望ましいと考えられる。実験的統制を行った研究による慎重な効果の検討を行う必要性は、介入を行わなくても同じ時期の自然な発達やメディアなどの社会的な影響因子によって効果が上がったのではないという証明が必要とされるからである。本研究の場合、小学生との交流は介入前から継続して行われてきており、交流活動のみが幼児の発達・改善に直接の影響を及ぼしたとは考えにくい。また、ほかに幼児に影響を与えうる可能性のあるイベントや出来事も特になかったようである。したがって、以上のような社会的スキルの向上は、幼児が小学生と交流活動を行う際に、幼児側に社会的スキル指導を行ってきた効果が示されたものだと考えることが妥当であろう。したがって、本研究の目的の第1は、一応達成することができたと考えてもよいだろう。

本研究における、集団的な社会的スキル指導の教育的介入は、2学期の半ばの10月に行われた。この時期は、新入園の子どもたちも幼稚園生活に十分に慣れ、さらに運動会などの行事

を通して活動が活発になってきた時期であった。社会的スキル指導の内容は、園内の新しい仲間と新しい環境に慣らすために4月5月に行うことも考えられるが、本研究のように、子どもたちが幼稚園の生活環境に十分に慣れたこの時期に介入を行ったことが、介入効果を向上させたのではないかとというのが、担当教師たちの見解であった。特に本介入は、たびたびの交流があるとはいえ、日々生活をともにしているわけではなく、発達水準も全く異なる小学校高学年の児童たちとの間で、事前に学んだ社会的スキルを実践するというものであった。それだけに、幼稚園の環境にも十分に慣れ、小学生たちとも顔見知りとなったこの時期の介入が有効であったのではないかと考えられる。

本研究の第2の目的は、本研究を発表した時点で一応の目的を果たしたものと考えてことができるが、小林・相川(1999)のあとがきの中で示唆されているように、社会的スキル指導はある程度のガイドラインはあるものの、その指導の方法は無数にあり得る。実践を繰り返す中で、よりよい指導の具体的な方法が蓄積されていくことが必要である。冒頭で述べたように、特に幼稚園や保育所において、保育者自らが指導をおこなった実践事例はまだ少ない。今後様々な実践がなされ十分な議論を経た上での、幼児領域への発展が望まれる。

## 引用文献

- 藤枝静暁 相川充 2001 小学校における学級単位の社会的スキル訓練の効果に関する実験的検討 教育心理学研究, 49, 371-381.
- 福田真奈 1998 行動モデルの提示が幼児の社会的スキルの変化に及ぼす効果 日本教育心理学会第40回総会論文集 118
- 後藤吉道 佐藤正二 高山巖 2001 児童に対する集団社会的スキル訓練の効果 カウンセリング研究, 34, 127-135.
- 後藤吉道 佐藤正二 佐藤容子 2000 児童に対する集団社会的スキル訓練 行動療法研究, 26, 15-24.
- 金山元春 後藤吉道 佐藤正二 2000 児童の孤独感低減に及ぼす学級単位の集団社会的スキル訓練の効果 行動療法研究 26, 196-204.
- 小林正幸・相川 充 1999 ソーシャルスキル教育で子どもが変わる 図書文化
- 佐藤正二 日高瞳 後藤吉道 渡辺朋子 2000 幼児に対する集団社会的スキル指導の効果 宮崎大学教育文化学部附属実践研究指導センター研究紀要 第7号 63-72.
- 佐藤正二 佐藤容子 岡安孝弘 立元真 1999 保育所における幼児の対人行動訓練の実践的研究—集団社会的スキル訓練マニュアルの開発—平成10年度産学連携等研究報告書(宮崎県児童家庭課)
- 佐藤正二 立元真 1999 児童生徒の対人関係と社会的適応・予防的介入 教育心理学年報 38, 51-63.